
秘密な私

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密な私

【Zコード】

N3124D

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

ある秘密を持つて いる 雅渚みやびなぎさ 石田 実介いしだみのすけ といつ男に出会い。渚の運命が激変する。

秘密

私は雅渚^{みやびなみ}。夢の吉学園高校に入学した高1！私にはある秘密がある。・。
・。

「ええ！渚ちゃんって不良？！」

「しー！しー！…声大きいよ」

「だ、だつて…・・・ビックリしちゃつて…・・・」

「普通だけど？」

「やつ、私は…・・・不良（元）なんです！」

「だつてさ、渚ちゃん…・・・可愛いし、美人だし、髪サラサラだし、素直だし、背高いし…・・・。不良なんて思えないよ・・・」

「七海…・・・」

そんなに思つてくれたなんて…・・・。

「嬉しくよー嬉しくよー、七海～！…！」

私は七海^{ななみ}に抱きついた。

「く・・・苦しこよ～。渚ちゃん…！」

「わ～ゴメン…！」

私は急いで体を離した。

「やっぱ不良なんだねーー力強い」

「ハハハ…・・・」

そんなことで再確認されるとは・・・。

彼女は、**夢原七海**。ゆめはらななみ私の大大大親友。

「ねーね！渚ちゃん好きな人いないの〜？？」

「え？！いないよ！そんなの・・・」

「えー！バリバリいそなにな〜」

そ・・・そんなイメージが・・・。

「**七海**はいるの？」

「いるよ」

「誰？」

「**榎新二**君」

「ええ？」

「あ、あの・・・！」

「あの！！」

成績優秀。スタイル抜群のあの人〜？！」

「ライバル多そう・・・」

「多いよお！大変なんだ！！でも頑張る――！」

「「ファイトお！」」

頑張れ。七海・・・。

そんなことを考えてたら

ドンッ

誰かがぶつかって来た。

「誰だ」「ラ、ア、?..」

私は不良の時の癖でキレるとマジヤバい。

「ひいッ!..」

「あ、ん、?..」

よく見ると、男がいた。

「誰だお前?..」

「お・・・俺は・・・あきだじゅうき行田光輝・・..」

「イツ・・・、完璧ペラリてるな・・..
よわっちいな。

「ふうん。お前アタイになんか恨みでもあんのか?..」

「い・・・いえ!..ちよつと急いでてぶつかつただけですーーー!..」

「あ。そ。じゃあ早くどうか行きな
「で・・・でも資料が・・..」
「資料?..」

足元をよく見ると資料が散らばっていた。

光輝ひかりつて奴は資料を集め始めた。

「しゃーねーなーアタイも集めてやるよ」

私と光輝ひかりつて奴は資料を集めた。

「よしーこれで全部だーー！」

「あ・・・ありがと・・・」

「まーー！アタイもアンタをビビらせちまつたからなーー次は気をつ

けろよ」

「おー！」

「おめー調子のんなーー！」

「は・・・はいッ！」

光輝ひかりつて奴はスターラサッサと去つて行つた。

「なーぎーたーちゃーん~」

七海ななみの体が震えていた。

「ン？」

「不良つて・・・怖いね」

「だーいじょうぶーー私を怒らせなればいいだけだよッ」

「うんーそりだねーー！」

つて！

私が元不良だから悪いのに、なんでえらそうと言つてんのよーーー

諸のバカッ！

この会話をある奴が聞いていた。・。・。
私はそいつに気づかなかつた。・。・。

眞実

私は学校の帰り、人気の無い道路を歩いていた。

「雅^{みやび}・・・渚^{なぎさ}?」

背後から低い声が聞こえた。

振り向いてみると、帽子をかぶった男が立っていた。

「誰だお前?」

私は不良の時の口調で聞く。

「覚えてねーのか?」

「お前なんか頭の隅にも残つてねーよー」

「ほー?」

男はそう~~言つ~~と、急に足をあげて私に蹴りかかってきた。

「おつと」

私は軽々とよけた。

「やつぱり・・・、元ヤン隊長にはこんなもん楽勝か・・・」

「あ、ん、? なんでアタイのことそこまで知つてんだよ・・・?」

蹴りかかってきたあの感触・・・。
ただ者じゃねーな・・・。

「だつて俺・・・」

男はそう言ひながら帽子をとつた。

「現役ヤンキー、元副隊長、いしだみのすけ石田実介だ」

元・・・副隊長・・・?
え。まさか・・・

「え? もしかして・・・実ちゃん? !」
「そうだよ。やつと思ひ出したか、渚」

やつぱり・・・

いつも冷静で、私の暴走を止めてくれて、私を支えてくれた・・・
あの実ちゃん? !

なんか・・・大人っぽくなつてる・・・。

背も伸びたような・・・。

「で? アタイに何か用? ?」

「・・・ヤンキーにまた戻つてくれないか?」

「・・・え? どうゆうこと? ?」

「今の隊長が暴走してゐるんだ。なきわち仲間達もみんな止められなくて・・・
。俺でも無理なんだ。それで、渚にそいつの暴走を止めもらつて、
また隊長になつてほしいんだ・・・」

「・・・無理よ」

「なんでだよ! -」

「ヤンキーやめる時言つたでしょ?」

——2年前——

私この頃はヤンキーの隊長をやっていた。

「隊長！またあいつらが借金を返しやせん！…」
「はあ？！マジかよ・・・」
「どうする渚？」
「うーん・・・。よし！アジトに突入だ！…」
「「ういっス！」」

私達は借金を5年も返さない奴らのアジトに潜入した。

「グッ」
「うわっ」
次々と部下達を倒していく。

「おめーがボスか！」
「ふんっ！何しに来た？」
「とぼけんな！借金返せやボケエッ！…！」
「なんのことだ？」
「コノヤロオ！…！」

私はボスに殴りかかった。

数分後、

ボスの顔は腫れあがり、ヤバイ状態だった。

でも私はやめなかつた。

「や、やめひッ…渚…。」

実ちゃんが私の暴走を止める。

「はなせ実ちゃん…」

「我慢するんだ…。」

「…・・・シ」

私は舌打ちをしたが実ちゃんにめぐじて我慢する。

「す・・・すいませんでしたあ」

ボスは腫れた目から涙を流していた。

「こますぐ借金を返せ。やしたらゆるしてくれ」

「わか・・・」

「あひッ…。」

ボスの言葉をやがて、高校生ぐらゐの男の子がやつて來た。

「語…・・・」

え・・・・

「マイッ…・・・。」

私は固まつた。

「渚…どうした…。」

そう、コイツは私が小学校の頃好きで好きでたまらなかつた大好きな人だつた。

「さと・・・る君？」

「え。雅^{みやび}？！お前ヤンキーだつたのか・・・。かつこわりいな

がーん

か・・・かつこわるい・・・。

最悪だあ。

「それより雅^{みやび}！この人を見逃してくれ！金なら俺が払う。だから・

・」

私はシヨツクのあまり・・・

「はあ？アンタが今払えるつての？？」

愛しかつた人にこんな口調で言つてしまつた。

「今は無理だ・・・。でも！いつか必ず返す！」

「信じらんねーな。アタイ達はこの人を5年も待つたんだ。今すぐ返し・・・」

悟君はその場に座り込んだ。

「殴れ！この人の変わりに殴れ！！元はと言えば俺のせいなんだ！」

！」

なんで・・・？

なんでこんな奴のために・・・。

「もついい。何年でも待つてやる。ただし…5年以上経つても返さなかつたら…・・・お前の命ねーから」

私は悟君の胸ぐらをつかんで言つた。

「・・・分かつた」

「野郎どもー退却だッ」

「「うーっス！」」

私達がアジトの入り口に着いた時、

「雅！」

悟君に声をかけられた。

「何

「俺・・・はつきり言つてやった。あんなに可愛かつたお前がこんななかつこ悪くなつて・・・。ヤンキーなんてやめろよ？俺、そんなお前嫌いだ」

そつ言つて悟君は去つて行つた。

“ そんなお前嫌いだ” ・・・か。

私はその後すぐにみんなに話した。

「野郎どもーよく聞け。・・・アタイは今日で隊長とヤンキーをや

のる！・！

「なんでだよ！」

「隊長ちゃんねー！」

そういう声が聞こえた。

「渚なんでだ？」

「アタイは今まで人を倒したり、物を壊したり普通にしてきた・・・。
でも、もうそんなことがアホらしくなったんだ！！だから・・・。
ワリィ」

私は頭を下げる、自分のアジトから去つて行つた。

そして私はヤンキーをやめた。

——2年後——

「（つだ）ナガ）！ 滅達に者が必要なんだ」
（たわわら）

「アタイはもうやめたって言つてんだろッ。」

卷之三

「今の話聞いてるとまだその話つて奴のこと好きつてこととか?」

「だまれコノヤロオ————！」

バキツ

私は実ちゃんの頬を殴つた。

「へへッ。あん時と全然変わんねーな」

実ちゃんは殴られたにもかかわらず、普通の顔をしていた。

「そいつのためだけに辞めたのかよ」

「・・・だまれ」

「アタイの気持ちしんねーくせに偉そうに言つたじやねーーー」

「知るかよ渚の気持ちなんか！」

「もーイヤなんだよ・・・。嫌われんのは・・・」

「・・・渚・・・」

私の目にはいつの間にか涙が溢れていた。

「もう・・・1人はイヤだ・・・」

「渚は1人じやねーよ！」

「え・・・？」

「俺がいんじやんツ」

実ちゃんはニカツと笑つた。

「実ちゃん・・・」

「まーまた考えといてー」

やつ置いて実ちゃんは去つて行つた。

・ あんなこと聞かれたばど ・・ どうしよう ・・。

勝負

今は授業中。
でも・・・集中できない。

昨日のこととで悩んでいるからだ。

その時、

ガラッ

教室のドアが開いた。

みんなが一斉に見る。

そこには色黒で金髪の男がいた。

「雅渚みやびなねやはどこだあ！」

男は私の名を呼ぶ。

「隊長。 あそこみのに・・・」

実ちゃんみのが隊長に私の居場所を教える。

なんで教えたよバカあ！！

男はズカズカ近づいて来る。

「お前が・・・
「何?」

私は教室といつこともあり、少し落ち着きながら話す。

「ちよつと來い」

そう言つて男は私の手を引つ張りながら中庭へ向かった。

——中庭——

「ンで? 何だよ
「俺と勝負だ!」
「はあ?」

意味わかんない。

なんで初対面の奴と勝負しなきやなんないんだよ。
私・・・何かしたかな??

「俺の名は、かるこな軽井沢修けいせいしゅう」。現役ヤン隊長だ」

「あんたが今の隊長?」

「イツが・・・
「イツ暴れるんだあ。

「現役ヤン隊長か元ヤン隊長どっちがつえーか勝負しき

「アタイは・・・もう戦わないって決めたんだ!」
「つるせー!」

かるいざわ 軽井沢は殴りかかってきた。

私は軽々と交わし、その拳を掴む。

「クソツ！なんで勝負しねーんだ」

「だからもう戦わないって言ってんだろ」

「勝負しろ！ボケエエエ！……！」

「ボ・・・ボケエ？」

「そうだ卑怯者だ！」

「元ヤンつてことは先輩だぞ？！その先輩に向かってボケつて……」

「そんなこたー知るか！」

「イツ・・・。

「ちょっとこりじめむか！」

「調子乗んな」ノヤロオ……！……！

私は軽井沢の腹を殴つた。

「グツ」

かるいざわ 軽井沢はその場に座り込んだ。

そして座り込んだまま足を横に出し、そのまま蹴り回してきた。

「わっ！？」

私は足をとられた。

軽井沢は私の足を掴み、私の体を振り回して木にぶつけた。

「う！」

私は立つ事が出来なかつた。

「渚！」

みの
実ちゃんが現れた。

「み・・・のちゃん・・・」

「お前、戦うのかよ」

「これで・・・最後の戦いだよ」

そういひで終わる。

もしかしたら「ココで死んでしまつかもしれない。

でも、いい。

やる」とはやるから。

後悔はあつたなと思ひながら。

「実ちゃん協力して

「え？！」

「アソコを倒したいの。でも・・・今のアタイの力では無理なの。
だからお願い

「う！」

実ちゃんは黙り込んだ。

「・・・分かつた！」

実ちゃんはそう言って私の腕を引っ張り、体を起こしてくれた。

「よし！行くよ！－」

「うこつス！」

実ちゃんは軽井沢の背後に回り、背を押した。

その衝撃で軽井沢は私に近づいてきた。

そして私は軽井沢のアゴを上向きに殴った。

軽井沢の体は空中へと上がる。

体の軽い実ちゃんはジャンプし、飛び蹴りを決めた。

数秒後、
軽井沢はこうさんした。

雅渚・・・

「何だ？」

「・・・隊長に戻る気はねえのか？」

「ねえよ」

「そんなつえーのにか？」

「・・・つえーよえーの問題じゃねーよ
「じやな」

私は教室に戻った。

今の時間は休み時間だった。

「渚ちゃんー」

七海ななみが小走りで近づいてきた。

「だ、大丈夫だった？」

「うん 平気だよー」

これでいい。

こんな平和でいいんだ。

・・・なに、どうして胸がモヤモヤしているの？

渚の決意—戻る—

私はその口夢を見た。

私がまだヤンキ・で隊長をやっていた頃の夢。

私はとても楽しそうだった。

・・・でも、今はちがう。

そう思つたら暗闇に飲み込まれた・・・。

ガバッ

私は起き上がつた。

「なんで・・・あんな夢を・・・」

本当は思い出したくなかった。

思い出したら戻りたくなつてしまつから・・・。

今は夜中の4:00。

まだ寝ていたいけど目が覚めてしまった。

「はあ～・・・。ヤンキ・か」

私はまだ悔いを残していた。

なのに戻りつとしない。

嫌われたくからだ。

もう誰にも嫌われたくない・・・。

～ピンポーン

チャイムが鳴った。

私は一人暮らしなので私が出るしかない。

「もお・・・。こんな夜中に誰?...」

ガチャツ

「あ、い、?」

そこには実ちゃんみのが立っていた。

「よお」

「な、に、？」

「・・・わりに起こした？」

「いや・・・、わざわざ起きたばっか。入れば？」

私は実ちゃんを家に入れた。

「で、どうおせヤンキーの」とぞしょ？」

「わかつてんじやへん・・・ぞうだよー！」

みの実ちゃんは最初はふぞけたが、しらけた空氣を読んでまじめになつた。

「戻らないよ」

「やつ言つなよ」

「はあー・・・。何度言つたつて一緒に決意は変わんねーんだよ」

みの実ちゃんは黙り込んだ。

「あいつのせいなのか・・・？」

「はあ？」

「あいつがまだ好きなのか？」

「だまれ！」

「」まかすなよッー！」

みの実ちゃんは私の体を壁にぶつけた。

「何すんだテメー！？」

「好きなのか？」

みの実ちゃんは私がキレてるのにびびつもせずに真剣に口を開いた。

「好きだつたよ・・・でももつ嫌われた・・・」

「じゃあもう嫌われねーじゃん」

「わからぬーよ・・・もしかしたら実ちゃんに嫌われるかも・・・」

「俺は嫌いにはなんねーよッ!..」

「俺ちゃんと私の言葉をさりげなくつた。

「俺と仲間の間は全員がつて一嫌わねーよーだつて・・・」

「みんな渚が好きだか

「え?」

「みんなが私を・・・?」

「ほ・・・んとうに?」

「あたりめーだろ!」

実ちゃんは私に向かつてピースをした。

私の田からぽろぽろと涙がこぼれた。

「私・・・戻る・・・みんなをもつ一度・・・信じじるよ

午後0：00。

私は自分のアジトへ実ちゃんと向かつた。
みの

「あ！隊長！！」

みんなが私のこと覚えていてくれた。

「テメエら・・・。悪かつた！！－もう一度・・・戻つていいか？」

「あたりめーだろ！」

みんなが私を認めてくれた！

もう一度信じてみるツ-----!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124d/>

秘密な私

2010年10月27日08時11分発行